はじめまして、私は今広島に在住していますが、大島家縁のものでございます。
大島小太郎の嫡男・裕の甥で、小太郎は大伯父にあたります。大島家に子どもがいなかったため、私が大島家の資産管理にあたりました。大島家について調べることがあり、インターネットを開いておりましたら、皆様の「大島家保存運動」を知り、筆を取らせていただきました。

大島家の資産整理にあたり、私のスタンスは「大島家の歴史と現在は、決して大島家のものではなく、私ども相続権者のものでもない唐津市と市民のものである」というものでした。

当時、瀬戸市長さんに御眼にかかった折、「私の相続分を唐津市に寄付したい」と申し出したところ瀬戸市長さんは「史跡として保存したいと思うが、あなたの分だけ寄付してもらっても埒があかない。他の相続権者の分も、寄付してもらえるようまとめてもらえませんか」といわれました。当時資産相続権者は20人におよび、その整理に10年余という長年を要しましたが、「寄付」について私の力不足で権者の意思をまとめることができませんでした。

あの屋敷には歴史が詰まっています。裏庭にあった倉庫が崩れ今は土に埋まりましたが、20数年前、私はその跡地から「高橋是清」差出の封書を見つけました。もはや倉庫あとは朽ち果て汚泥化しているかもしれませんが、あれでも長持がみつきり、その中から歴史のおもわぬ証言が見つかるかもしれません。

茶室ですが、京都の相国寺の住職、有馬頼底師に見ていただいたことがあります。師は「当寺でひきとりたい」とその価値を認めてくださいました。黒檀の床柱をご覧ください。刃物を受け付けないという堅固な黒檀に、職人が数年がかりでいどんで完成させたすばらしいものです。

このような話は歴史の片隅の一端でしかありません。大島家の歴史は、唐津とともにあり今地域がどのように歴史が引き継ぐかが問われる時にあると思います。

資産の整理後、幾度かあの屋敷あとにたたずみ、哀しみにくれたことがありました。ゆかりの私どもが、歴史の重みと地域の想いを顧みず、何もして差し上げられなかったことを恥ずかしく思います。

繰り返しますが、大島家は、唐津の歴史と共にあり、その形が無残にブルドーザーで打ち壊されることにいたたまれない気持ちでおります。

市長様、市議会の皆様、市当局のご担当者の方々、そして唐津市民の皆様、小さな地域社会ですから互いに傷つけあわず、知恵を尽くして地域の歴史と遺産を守り継ぐ方策を探っていただきたいと心底から願っています。